● 春のきのこの観察

きのこの本体はかび状の“菌糸”です。きのこは子孫を増やすための胞子を作る器官（子実体）で、植物に例えると花に相当します。
本体は地中や枯木の中で一年中生息していますが、きのこの発生する時期は種類により限られているのが一般的です。
春に発生するきのこは、アミガサタケ※、キクラゲ※などがあります。暖かい年には初夏のきのこが発生することもあります。
また、コフキサルノコシカケ※など多年にわたり成長するきのこも見ることができます。さらに、カワラタケなどの硬質の子実体のきのこは、前年の夏から秋に発生したものが、腐らずに春までその姿が残っていることもあります。これらの硬質の子実体は、雨などで水を含むと再び胞子を飛ばします。

参考：アミガサタケ（左）とキクラゲ（右）

※ アミガサタケ／2024 年の観察会レポート https://sizenkansatu.org/pdf/2024/maru2024_1rp.pdf
※ キクラゲ、コフキサルノコシカケ／2023 年の観察会レポート https://sizenkansatu.org/pdf/2023/maru2023_1rp.pdf

＜スエヒロタケ＞（末広茸）
各種の枯れ木に発生する、ごくふつうに見られるきのこです。
扇（末広）形から半円形の小さいきのこ（子実体）で、傘の裏にはひだがあります。よく見ると、ひだの先端が裂けていることが特徴です。

2025-1-6-1

Copyright © 2025NPO Sizen Kansatu Daigaku. All rights reserved.

戻る https://sizenkansatu.org/marugoto2025_1_rp.html

＜アラゲキクラゲ＞（荒毛木耳）
耳のような形をしています。キクラゲは漢字で「木耳」と書きます。
近縁のキクラゲに似ていますが、傘の上面は毛におおわれています。傘の下面は平滑で、この面に胞子が作られます。今回観察しているのは、昨年に発生したものと思われます。
栽培されて市販されている“きくらげ”は、このアラゲキクラゲです。キクラゲの名前がつくきのこは、橙赤色のアカキクラゲ、白色のシロキクラゲなどがありますが、これらはキクラゲとは、縁の遠いきのことされます。

アラゲキクラゲ　傘の上面（左）と下面（右）

＜クロコブタケ＞（黒瘤茸）
広葉樹の枯れ木に生え、黒い半球形のこぶ状のきのこです。
拡大して見ると、表面に小さい粒状の突起が見えます。
この突起の穴から胞子を放出します。
きのこを切ってみると、壺状の空隙が並んでいて、この中で胞子がつくられます。

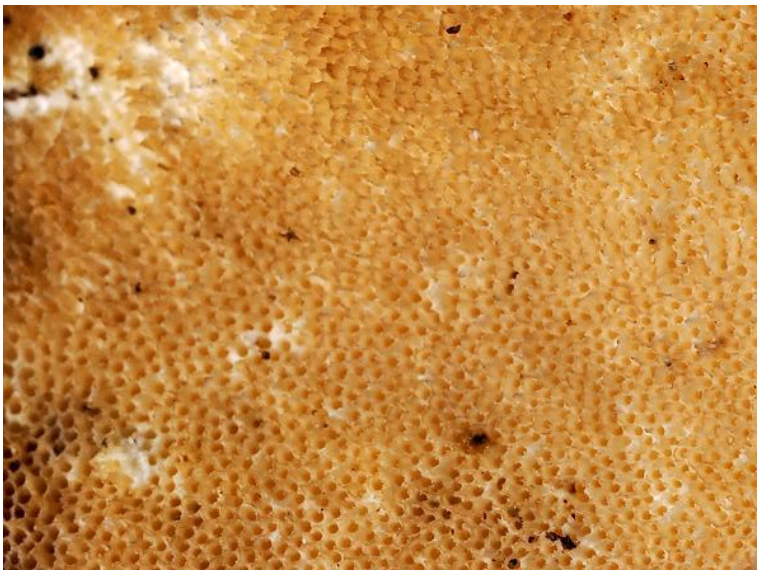
こぶ状のクロコブタケとその表面の拡大

2025-1-6-2

Copyright © 2025NPO Sizen Kansatu Daigaku. All rights reserved.

戻る　https://sizenkansatu.org/marugoto2025_1_rp.html

＜カワラタケ＞（瓦茸）
クロコブタケの生えていた枯れ枝にカワラタケがあります。
カワラタケも広葉樹の枯れ木に生えます。
多数のきのこが瓦を並べたように発生することが特徴です。
傘は硬い革質で、上の面には同心円状の模様があります。下の面にはたくさんの穴があり、この穴の内側に胞子がつくられます。このカワラタケは前年に発生したきのこだと思われます。
（根田仁）



カワラタケ　上の面の縞模様と下の面の穴の拡大

Copyright © 2025NPO Sizen Kansatu Daigaku. All rights reserved.
戻る　https://sizenkansatu.org/marugoto2025_1_rp.html